

浄土



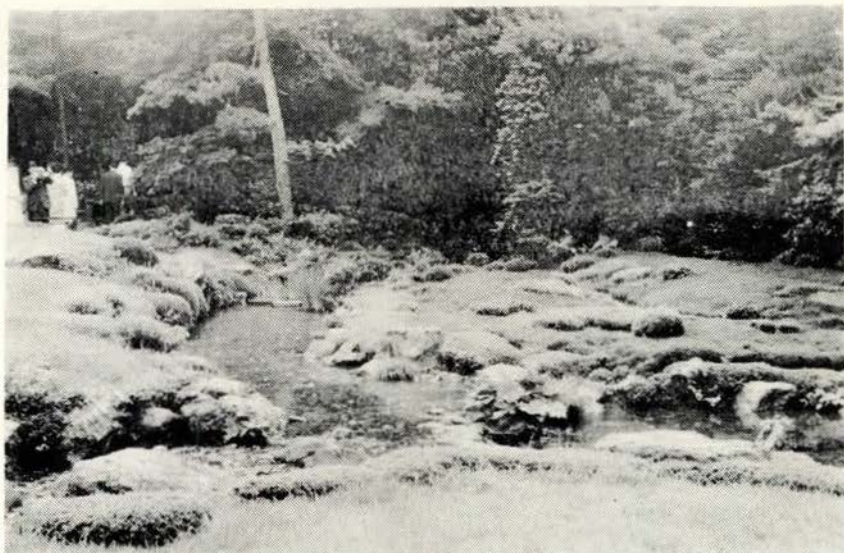
1973

3

昭和十年五月二十日 第三種郵便認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 改訂 (特別授承認雜誌) 第三二五号
昭和四十八年二月二十五日印刷 昭和四十八年三月一日発行

第三十九卷 ● 第三号

三 月 号



— 目 次 —

表紙 「菜の花」松涛達文画

春を待つ	井 上 信 光	(2)
ひがん法話 春彼岸のこと	吉 田 嘉 雄	(4)
私と『新聞』		(8)

望月 融・小川金英・稲葉綾子

少年講 福田行誠上人	内 山 憲 尚	(13)
選択集講話③ 第二章段について	奈 良 博 順	(14)
念仏・人と歴史③ 遊蓮房円照	伊 藤 唯 真	(18)
筑後善導寺紀行	磯 貝 基 教	(21)
異僧真覚〈第十四回〉	柴 田 六五郎	(24)
霊場を訪ねて《二十番札所・京都誓願寺》	兼 子 正 真	(28)
「道」大谷の禅房	高 橋 良 和	(30)
浄土宗の宝物 (2)		(32)



ねがはくば、花のもとにて、春死なん

そのきさらぎの、もちづきのころ

— 西 行 法 師 —

今年の春の彼岸の第二日目は三月の十九日である。旧暦の二月十五日つまり「きさらぎのもちづき」に当る。庭前には遅咲きの梅を始め、沈丁花、木蓮、椿などまさに百花燎爛りやうらんの風情ふうせいである。今までどこにかくれていたかと思う花々の訪れである。

人のいのちは測り知れぬものがあり、いつどのようなことになるか凡愚のよく知るところではない。しかし、もしみ仏のお許るしが兼うなれば、ハラハラと散る葩片はなびらに埋れて眠りたいものである。禅家の言葉に「しかもなお、かくの如くなりといえども、花は愛惜あいせきに散り、草は棄嫌きけんにおうるのみなり」とある、愛惜の内にかの国に旅立ちたいものである。

(S・T)



春を待つ

井上信光

(作家)

○
早春の淡い陽光が差し込む部屋で、ようやくペンを取

ることができるようになった。一月九日の晩、左顔半面が突然しびれ出し、耳鳴りと難聴を伴った奇病にとりつかれてから、二ヶ月あまり、生れて初めての闘病生活を余儀なくされたが、この間は私にとり、ある種の貴重な時間ともなった。ハント氏症候群と診断されたこの病気の原因は、風邪のウィルスが神経を刺激したり、身体に疲労が蓄積している場合、外気にふれた時に瞬間的に顔面片方がマヒ症状を起すといふものだそうだ。

発病後十日間あまりは、左顔面の感覚は全くなく、左側の目・鼻・耳・口はその機能を著しく低下した。やが

て症状は右上下肢への軽いしびれを伴ない、歩行も一時はおぼつかないほどであった。

今まで病氣らしい病氣をしたことのない私にとり、その精神的圧迫は、うまくいい表わせない程のものであった。健康時には考えもしなかったようなことが、次々と浮んでは消え、消えては浮び、自らを窮地に追い込んでいくのであった。

そんな折、頭をかすめ、考えさせられたことを思い出したのである。それは日頃より世話になっている某老僧の永年に亘る人生訓として、絶えず口にされている。

ひととは健康時には己れを顧ることはしない、一たび床にふした時に後悔したのでは遅いのです。まずもって

御身体を大切に、健康に留意することこそ、一番の世渡りの方法でしょう。

という何の変哲もない当り前のことばであるが、いざ、そうした立場に立たされると、千金の重みにも増した金言となつて、心の奥深く入り込んできたのだ。確かに今まで何事もがむしゃらにやり、我が身を考える余裕もなかったのは事実である。少し位いの変調は、若さにまかせて、押し切ってきたが、そうしたことの蓄積が今日の病いの遠因になったとも思う時、日頃あまり考えもしなかった、健康であることの幸せが、これ程までに貴いものであったのかと、深く考えさせられた。

病いをば静かに床に養いつ
静かに歩め西の一道

病みて後病まざることの幸せを

あわせて知りぬ病いも知識と

昔の人は絶えず死と対峙した生活をされたという。死にさらされながらも、我が身、家族のために敢然と立ち向いたのであらう。しかし、そこには生に対するひたむきな執着心があったことも事実である。

これに引き替え現代人は、そのあまりにも豊かになつ

た生活の故か、絶えず己が身のまわりにあるはずの死に對し、あまりにも無頓着であり、死は他人事であるかのような錯覚に陥つてはいないだらうか。

これは一方から考えれば大変幸せなことであり、そうありたいものであるが、人の生死は人為的に左右できるものではない。いつ何時どのようなことが、我が身にふりかかってくるか、全く分らないのが人生であらう。

ただ綺麗ごとだけで一生が送れば、こんな幸せなこととはないであらうが、誰一人としてそのような安易な考えは持っていないと思う。それは表面上は平静を装っているものの、心奥では絶えず、ある種の不安観が内在していることによるためである。それは日々の生活上の問題もさることながら、この究極にあるものは己れの死以外の何ものであらうか。

陽は早や西に傾むき、冷氣がただよいはじめた部屋で唯一人ペンを走らせる時、つくづく生きることの貴さと、生きるが故のつらさを感じ、一日も早く健全な身体を回復し、やがて来るうらかな春のように、明るい心身を取りもどさんと思うことしきりである。



春彼岸のこと

吉田喜雄

(東京目黒蟠竜寺住職)

暑さ寒さも彼岸までといいますが、季節の変わり目に迎えるこの仏教行事はいかにも自然の美しさとともに生きてきた日本人らしいものといえます。

古来、立春・春分・立夏・夏至・立秋・立冬・冬至は八王日とよばれて、陰陽の交替の日として季節の変わり目となっております。

とりわけ寒い冬が終って、まずのぞんでいた春を迎える雰囲気にあふれているのが春の彼岸です。

花もそろそろ咲きはじめる頃はうれしいものです。

仏教では世界を三界即ち欲界・色界・無色界の三

つにわけて考えてみました。

この世界の中の色界の頂上を「色究竟天^{しきくわうぎやうてん}」と申しまして立派な宮殿があり、その宮殿の前に「天正樹」という木があつて春になると美しい花が咲いて七日にして散ります。青・黄・赤・白・黒・紫・翠の七色の花弁はともきれいで、すばらしい香を放っています。

これが秋になると七色の実がなるとされています。花が開いている間が七日間で、実がなっている間が七日間で、それから彼岸も中日をはさんで一週間とされているということです。

また、欲界の中に「夜摩天^{ヤマテン}」と「兜率天^{トスツテン}」という二つの世界があり、ちょうどその中間に「中陽院^{チュウヨウイン}」という城があって、その中に「雲兜台^{ウントウダイ}」とよばれる小高い広場があり、そこに毎年彼岸になると七日間、天上界の方々が集まって、下界の人間の演ずる善事・悪事の行爲について話しあうとされています。場合によってはきびしい審判となることもあるでしょう。しかし、天正樹のある「芬薫として香気風を送る」のような美しい背景の中での話し合いは自然と和らいだものとなるような気がいたします。

天上界は、華ばかりでなく天鼓・天樂等の音楽や舞踊も用意されているのですからなおさらのことです。

以上の説話はおそらく後世の人が作ったものと思われませんが、お彼岸には善いことをして天上のよい審判を受けたいと思えるから不思議です。

それにしても、仏教行事のある度毎に、この小さい自分を美しい自然と宗教という大きい世界にとけこませて考えてゆく東洋人の感覚は素晴らしいと思います。

さて、もともと彼岸という語は梵語の波羅蜜多

(はらみった)の訳語で、到彼岸という語をあて、彼岸に到達するという意味であります。

私共浄土教徒は彼岸を極楽浄土とつけとています。阿弥陀如来のおられる浄土へ往生したいと願うのが浄土願生者なのです。

ですが、ものの考え方、うけとり方は一つだけとは限りません。時と処と人によって違う場合もあります。特に仏教の教えは、その意味する内容が非常に深いものですから、いくつかの面をもっていると思います。

すなおに浄土願生者としてうけとってゆくの本来ですが、一面力強い実践力を主張するやり方もあります。

波羅蜜多を六つの項目にわけて考えてみますと、

- 一 布施(ふせ) ほどこす
 - 二 持戒(じかい) つつしむ
 - 三 忍辱(にんにく) がまんする
 - 四 精進(しょうじん) はげむ
 - 五 禪定(ぜんじょう) 心をしずめる
 - 六 智慧(ちえ) 円満な智慧
- 一つ一つ目標を定めて実践してゆくのです。

季節の美しさの中にとけこんでふんわりとうけとったお彼岸、天上界の夢幻のようなことの中に味うお彼岸も、その裏側には、ちゃんと折目正しい仏教の実践目標が用意されていたのです。この大項目の一つをとってみても、仲々内容の豊かなものばかりではありませんか。

私達は、まわりから受け取ってばかりいるのですから、ほどこさねばなりません。人につくすのです。恩を返すのです。(布施)

わが身のわがままをつつし、み、がまんして(持戒・忍辱)物事にはげむ(精進)ことです。

でも口でいうことはできても実行はむづかしいのです。それで心をよく整理して、しづかにその深いところをみつめることをせねばなりません。(禅定)さて、私にそれができるでしょうか。

円満な智慧があればできます。円満なというのですから、かけるところがないのです。

なかなかむづかしいことです。

如来のお力をかりなければならぬでしょう。

自分で実践してゆくのですから積極的なうけ取り方と言えます。実践してゆくうちに勇氣も出てくる

でしょう。

「人生は苦なり」として正面から物事にぶつかってゆく姿が生まれてきます。

また、この六波羅蜜を別な立場で考えた人もおります。

それは自分の行動してきた生活を整理する方法として受けとっているのです。

自分の生活で布施にあたる部分があったかどうか。そのやり方が正しかったかどうか。

何かの機会にもう一度吟味してみることです。このように目標を定めて実践してゆく時と、生活を整理してゆく時とは少しちがったやり方だと思いますが、実際には両方とも必要なことです。

少し理屈はくなりましたが、このことを腹におさめて、お彼岸になれば天正樹の七色の実をまねたと言われる彼岸団子(だんご)をつくり、仏に供養し、先祖の墓にお詣りして、何事もなく静かに帰ってゆく仏教者の姿は日本人らしいものだと思います。

彼岸の中日には太陽が一日の行動を終って真西に沈んでゆきますが、聖徳太子は大阪四天王寺の西門を開いて礼拝されたと伝えられています。

東方には薬師如来をまつり、その眉間の白毫びやうごうから光がでて西方の阿弥陀如来のいます八葉の蓮華台（如来の座っておられる台）におさまると信ぜられたものです。

四天王寺には阿弥陀如来像もまつられており、後白川法皇も、源頼朝もお詣りされたと伝えられておりますが、聖徳太子がそのはげしい時代に生きられて、国づくりと仏教興隆のために多くをつくされ、そして西方に向って礼拝された姿は、乱世に生き、力一杯に生きた人ほど、強く西方浄土をおがめるのではないかと思われまふ。

浄土教のよりどころとなっている經典に、無量寿經・観無量寿經・阿弥陀經がありますが、この観無量寿經の中に日想観ということが説かれています。

宗祖法然上人の師善導大師はこの日想観を説明して「自分の心を定めるために春秋二季をえらび、西方に心を向ける方法がある。陽は真東より出て真西に没する。弥陀の国は陽の没する処にあり」（観經定善義）とされて西方に陽の没するのをみて浄土を思慕するのを日想観とされたのです。

ここで次のことを書いておきましょう。

前に述べた四天王寺の西門の外に石の鳥居が立っていて、その鳥居の内側に引導石があり、聖徳太子はおなくなりになられてもこの石のところにあらわれて（影向石えいこうせき）西方浄土を願う人々を極楽の東門にみちびきたいと誓われたと伝えられ、江戸時代には、人がなくなると棺をかついでこの石の前におき、すでになき聖徳太子の引導をうけ、それからお墓を守ってくださる地藏尊の前を通過して埋葬したといわれます。（四天王寺伽藍記）

このことは無量寿經の日想観の思想が日本において実際に信ぜられていたことを示し、彼岸になりますと殊更に思い出すことです。

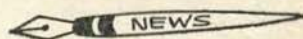
彼岸は七日間にわたります。誰でも何かを考え、何かを行ずるでしょう。

そして、心から何かを求めるでしょう。

私は浄土願生者です。浄土へ生まれることを願っております。ささやかな波羅蜜行の実践をもしたいと思ひます。

それにも増して法然上人の御指示に従って念仏の一念一念に阿弥陀如来の誓願をたしかめつつ彼岸を迎えたいと思ひます。

ニュース



望 月 融

(東京北区円勝寺住職)

マス・メディアへの不信

「新聞は社会の木鐸」という言葉は今日あまり聞かず次第に死語になりつつあるようです。一日の発行部数が数百万部といわれる全国紙の編集者や記者が果して「社会の木鐸」としての意気込みで毎日真剣に仕事にとりこんでいるかどうか大いに疑問に思います。戦前から戦中にかけて新聞が時の権力者に如何に迎合した記事を書いたか。そして戦後は一転して民主主義の旗振りたることを自認し、単に古いというだけの理由で、どれだけ多くの良き美しき伝統・文化・習俗を破壊したり傷つけたり

私と『新聞』

してきたか。新聞は常に弱者大衆の味方と称しながら結局混乱した衆愚政治の片棒を担いできたように思われます。

ここで今思い出した事があります。もう間近に伊勢大神宮の遷座祭が大々的に行われますが、前回昭和二十八年の時でした。遷座祭の一番重要な行事である御神体の遷座行列が深夜の闇の中を静かに新宮殿に向って進んで行きました。その時新聞社のカメラマンが神宮の伝統を破って赤外線フィルムでこの様子を撮影し、これを翌日新聞に大きく掲載したのです。しかも関連記事の中で神宮側のタブーを犯してまで当時の科学的新兵器を使用して御神体を撮影した事を得々と語っているのです。もっともその写真は薄布に包まれた御輿がボンヤリ写っているだけでしたが。一社だけでなく大新聞といわれるところが殆んど同様のことをしていました。これを見た時、神道者でない一仏教徒としても私は大変不快な気分になれ

ました。この様な児戯に等しい軽薄な暴露趣味はただに新聞のみでなく、その後も広く吾國のマスコミ界の風潮である事は甚だ悲しいことです。

また新聞を読んで何時も思うのは、どうしてこうも短絡反応的、教育ママ的、ヒステリックな発想で記事を書くかということです。一本調子で、視野の狭い青臭い正義観でしか物事を見ようとしなない記事が多すぎます。表面化した結果としての現実のみを見てカッとなり、その原因となった真実の解明が大いに不足しているようです。また危険なベトナム戦線に特派員を派遣し決死的報道をするのも良いが、足元の国内の事柄に関しても、より勇氣ある、思慮ある、秀れた記事を書いてもらいたいものです。新聞にとってその死命を制すると思われる彼の言論出版妨害問題が表面化され、世論が喚起されたのは、それまで名も知らぬ一小出版社と二三の人間の勇氣ある行動があったからで、大新聞はその尻馬に乗っただけです。この十数年前より色々な妨害の事実が起つていても少しも大新聞は取り上げようとしなないばかりか、妨害者側の宣伝物の広告などを新聞半ページ大、時には一ページ全体にわたり掲載している仕末でした。広告が新聞の重要な財源であるかぎり広告を中止しろとは申しま

せんが、広告は広告、報道は報道として新聞本来の筋は通すべきです。

数年前の事ですが某週間誌に当時新進の落語家と徳川夢声老の対談がのっていました。――夢「話の種に新聞など沢山読みますか」落「いいえ全然、新聞は読んでいません」夢「ほー 今時新聞を読まぬとは、コリヤ一見識ですな」――この落語家の返答はいささか眉唾ですが、夢声老の「一見識ですな」の発言は一寸面白いと思いました。今は一億総評論家の時代です（先日テレビに自動車評論家と称する人が出てきたので世事にうとい小生はビックリしました）。猫も杓子もマイクを突き出すと忽ち一言居士と化します。しかし人々の意見が皆新聞（又はテレビ）にのった毒にも薬にもならぬ八方美人的記事の受け売りであって、素朴な少数意見でも良いから自分の信念、体験からの発言が極めて少なく、あっても無視される事が多くあります。この事は現在正に情報加害児、マスコミ公害が氾濫している証拠といえましよう。マス・メディアからの日目の情報洪水に対し其れ等を選択し思考し記憶するには、あまりに人々は忙がしすぎ、吾々の頭脳は貧弱すぎるようです。由つて最後にマスコミの代表たる新聞社に対して一言、

「大新聞よ、たまには有用な白紙の新聞？　を配達せよ。徒らに印刷した新聞ガミを配り、うるさいチリ紙交換屋だけを儲けさすな」

毎日の新聞を

三部経の現実版として

小川 金英

(岩手教区教区長)

新聞は新聞であらねば新聞の価値がないのでしようが、多忙に取紛れて旧聞になる事の多い私です。一昨日の新聞にこんな事が、等と話かけられ、うるたえて、その新聞を探すのですがその頃はすでに新聞紙になっている事が多く、惜しかったナーと思うのですが後のまつりであります。今後はしかと読もうと思うのですが仲々実行になりません。

私が新聞を手にするのは朝の勤行を終えてからの事として、先づ第一面の大きな文字を目で読み、次に三面記事といわれる面を開いて読みはじめ、そして社説など見

て再び一面を読み直すのが通例です。

私は政治的な立場の人間でも、又経済人でも、文学的立場の文化人でも無いのでして、ほんの貧弱な宗教的な人間とでもいえましようか。ささやか乍らその道を歩ませて貰っているのです。そうした立場の関係である為めか、新聞を見る面も自ずから社会面、社会事相に向けられるのでして、然も私があえて探すのでなくとも、関心の持たれる記事は直ぐ目につき、心に読み聞かせてくれるのです。不思議に感ぜられる事さえあります。

元祖上人が暗夜の読書にも重要な経釈の箇所は光りを放ちて示されたと伝えられてますが、さもありなんと有難度く拝されます。

今日程教育が高度化され、経済も極度に成長した時代は無いであろうといわれますが、それなのに何故か息苦しいこの頃の世相であります。

新聞は毎日の様に火災だ、事故だ、災害だと痛ましい悲しい記事を、或る時は憤りを、又涙をさそう程の感激を覚えさせる温かい人情、善意の人、気の毒な人、憎らしい人、こんなニュースを通して、私の心の根をゆさぶり、そして又大衆との心のふれ合いをこの社会面の中に見い出しています。

私は型の如く勤行には無上甚深微妙法と開経偈を誦えるのですが、今更の様に開経偈の意が解りかけて、一切のものは善悪を問わず仏陀の説き玉う教そのものとして目に、耳にそして肌に感ぜられるのですが、新聞を手にする時も又同じ様な気持で、目を向け、即ち大乘妙典否三部の妙典かと受取られてなりません。

記事の一つ一つここから如来の大悲を拝し真実の義と相を解らせて頂くこよなきたよりといただかれます。目を掩う様な記事相もあります。だがそんなであればこそ大悲の本願があるのだと沁々と心を打つものがあります。

三面記事のみに目を奪われる者は低階層だとたしなめられもしました。勿論浅学非才そのたぐいでしかない事は勿論ですが、赤裸々な人生相、これは余りにも非人道だと思えるものもあります。こんな事の奥底にも何んかを求めている姿が感ぜられたり、又求めつつも求めている本物を道はづれ、即ち求心の変相とも思えるものもあります。私はこうした数々の横道変相図を見、己れの反省と教えを、そして黙視出来ぬものを感じ更に念仏裡中、弥陀に生かされる者の生きる道をこの三面社会事相のから感じ受け、そして又この新聞材を他に接する折

々の教化財として大方の共感を呼び起し、感動を与え得たり大きな教化資源にさせております。

如上まことに当然なそしてささやかな新聞観と私の新聞の受け取方をのべましたが、兎もあれマスコミ時代と云われる今日、大衆の目を奪いそして大衆を躍らせる新聞の力を、積極的にほんの小欄でも一とコマでも宗教的心の啓蒙に活用出来ぬものでしょうか。

私は毎日新聞を手にし、即ち新聞問題を開経偈とし、目にする一切の記事を三部経の現実版として読まさせていただきます。御叱正を願います。

私と新聞

稲葉綾子

（浄土宗寺院婦人会常任理事
和歌山県那賀郡貴志川在住）

父の作ってくれた草紙が、昔、昔、と云うほどの古い記憶の中にある。新聞紙を四切りにして短い一方を、ていねいに糸で綴り、表紙の面に「日日新」（ひびあらたと父は云った）、と書いてくれた。新聞紙の活字が見えなくなるところまで、「ノメ、クタ、ニエ、ゴヨ」と、書いた上に書いて、習字の稽古をしたものだ。

屑屋も買ってくれない古新聞紙の処置に悩む今日、あの地面を草紙ですりながら学校に通った頃を思い出す。

年が明けて寒に入ると母は寒餅をついて、かき餅を作ってくれた。千枚になった餅を乾すために、新聞紙を細長く切り、更に二筋の縦の切目を入れて、餅を交互にさし、部屋の中にぶら下げて乾かした。生乾きの餅を五徳の上で焼くと、ぷーとふくらんで、そのやわらかい塩加減がなつかしいおふくろの味、それにつけても古新聞の利用価値は貴重なものであった。

先年、庫裡の襖のたてつけが悪く、新らしいふすまに替えた。納戸のふすまの裏側に、明治三十七年の新聞がはってあり、それに漢字の多い大きな活字で日露戦争の記事がのっていた。ゆっくり読むつもりで、うまくながし、丸く巻いて棚の上にあげておいた。広告欄には、「そごう呉服店」(今日のそごう百貨店)の広告がのっていたので、そごう百貨店に届けて上げたらと、更めて見ると置いた筈のふすま紙がなかった「きたないので焼きました」というお手伝いさんの言葉に啞然となり、今尚愛惜の念やる方なき思いである。

毎朝玄関に投げこまれる新聞を、畳の上にひろげて読む動作は、何の抵抗も感じない、全く無意識の日課とな

っている。

太陽、空気、水、新聞と云うほどに、人間の生活から切り離すことの出来ない新聞が、私自身の生活に、どのような存在なのか、更らたためて反省する機会を与えていただいたことに感謝した。

その結果知識の泉と云われる新聞がどれだけ私の生活分野に生かされているのか、考えてみると、その栄養摂取状態のきわめて不良であることがわかった。

四十六年、四十七年と助教師養成講座を受けるため、前期は大本山清浄華院、後期は知恩院勢至堂に、社会、家庭いづれとも断絶の二週間を過した。先年婦人教育視察のため五週間余りアメリカに滞在した時もそうであったが、新聞のない生活に全くむなしさみしさを感じた。このめまぐるしく変動する中で、行とは云え社会から隔離された状態は、少々時代に逆行をしているなどと、遠いふもとの街の騒音をききながら、せめて新聞くらいはと思った。しかし満行の時のあのすがすがしさは世塵を離れた結果に得られたものにちがいない。ともあれ、人間が人間であることを知る上にも重要な新聞の価値と、日日の新聞記事に見る諸行無常感の中に人間が息をつづけていることを、あらためて思うのである。

少年講 福田行誠上人

内山 憲 尚

(浄土宗児童教化連盟理事長)

近世日曜学校の起りは英国のグロセスター市において一七八三年にロバート・レイクス(一七三六年～一八一一年)により慈善学校として日曜日に開かれたのが始めである。このレイクスの日曜学校運動が「アメリカ雑誌」に発表されるや多くの共鳴者を得た。ことにメソヂストの監督アスベリーは一七八六年以来力をつくし先鋒となつて日曜学校の発展に努めた。一七九一年ヒアデルヒアに日曜学校協会が組織せられ一八二四年には米国日曜学校同盟が生まれ、更に一九〇〇年には世界日曜学校協会の設立を見、万国日曜学校教案の作製されるようになった。

キリスト教日曜学校が日本へ入つて来たのは、明治二十年以後で一八八八年(明治二十一年)「児童用キリスト教新聞」が発行され、一九〇六年ブラウン氏が米国から来朝、日曜学校

事業につくし急足に発展した。

仏教日曜学校はキリスト教日曜学校に刺激されて組織的に活動を見せたのは大正年間に入ってからであるが、児童を対象としての宗教運動としての少年講少女講の如きものは早くから見られた。

明治十三年(一八八〇年)芝増上寺の福田行誠上人(1868-1908)は少年講を開き児童を集めて法話をした。

明治の高僧行誠上人は文化三年武蔵国豊島に生まれ、幼にして小石川伝通院の伴頭寛淳の弟子となり、京都に遊学し、嵯峨の立道隠士について勉強、乞われて回向院に入り、伝通院から増上寺法主となった。学識博く、浄土は勿論天台、禪に及び「大日本校訂大藏経」を修し、人格識見高かった。反面洒落々として庶民を愛し絵をよくし、歌ことに道歌をよくした。

上人は仏教を大衆に説くに平易をむねとした。少年講を始め児童教化を実践したにちがいない。増上寺の少年講に関する文献がなく、当時どのようなにして何日開かれていたのか、どのように運営されていたのか詳しいことを知る由もできないことは誠に遺憾なことである。がキリスト教日曜学校の本への伝来の歩に児童を対象とした教化事業少年講を開かれた先見の福田行誠上人の偉業のあったことはわが浄土宗の誇りである。



選釋集講詠

〈第三回〉

第二章段について

奈良 博 順

(淑徳大学助教授)

—

周知のように、明年つまり昭和四十九年に浄土宗は開宗八百年を迎えるが、法然上人が浄土宗を開宗するにあたって、その抛り所にしたといわれているのが、善導大師の「一心専念弥陀名号（一心にもっぱら弥陀の名号を念じて）」にはじまる三十四字の短い文である。この短いが重要な文の出でくるのが、ここでとりあげる『選釈集』第二章段である。

第一章において、法然上人は「教判」つまり自分の主張が仏教の中でいかなる位置をしめるか、どのような価値があるかを示し、われわれの歩むべき道は、ただ浄土の一門のみであることを述べている。これに続いて、本

章では浄土門を選んだ上で、どのような行を修すべきかについて、善導大師の教えに従いつつ説明する。

まず法然上人は本章の標題に、

善導和尚、正雑二行を立てて、しかも雑行^{ぞうぎょう}を捨てて、正行^{しょうぎょう}に帰するの文

とかかっている。簡にして要を得た標題であって、本章の内容を端的に表現している。自分が弥陀の化身と仰ぐ善導大師が、往生浄土の行を「正行」と「雑行」との二つに分け、「正行」をとって、「雑行」を捨てるべきことを説いているのを抛り所に、自分の立場を明らかにしようというのである。

そして本文に入ると、まず善導大師の『観経疏』(『観

『無量寿經』に対する註釈書」の第四卷から「就行立信」(行について信を立てる)、すなわち往生浄土の行について、明確な信念・態度をもっていなければならないこと、をのべた文章を引き、それに続いて、その文章に対する法然上人の解釈(私釈)を加えている。そしてさらにこれまで述べてきた点について、その意味を一層明らかにするため、重ねて善導大師の往生礼讃の文章を引き、最後にまた短いものではあるが、私見をのべている。

第二章段はこのような構成になっているが、以下その内容について、紙面の許す範囲で紹介してみたい。

二

『選釈集』第二章は、次の文章ではじまっている。

観經の疏の第四に云はく、行について信を立つとは、しかるに行に二種あり、一には正行、二には雑行なり

このうち「(往生浄土の)正行」について、善導大師はひたすら往生浄土を明らかにした經典にしたがってつとめることであるとし、次のような五種類の行(つとめ)をあげている。

(一)、心をひとつにして(いちぢに往生を願いつつ)『観經』『阿弥陀經』『無量寿經』をひたすら読むこと。

(二)、心をひとつにして、浄土の阿弥陀仏(正報)と浄土の清純ですぐれたありさま(依報)にひたすら心を注ぎ、それを心に思いうかべ、觀察し、憶念すること。

(三)、心をひとつにして、ひたすら阿弥陀仏を礼拝すること。

(四)、心をひとつにして、もっぱら阿弥陀仏の名を称えること。

(五)、心をひとつにして、ひたすら阿弥陀仏を讃歎し、これに供養すること。

この五種の行について、法然上人は(一)から順に(一)読誦正行、(二)觀察正行、(三)礼拝正行、(四)称名正行、(五)讃歎・供養正行と呼んでいる。そして、これらはそれぞれ異なった行ではあるがいずれも阿弥陀仏とその浄土を目的とし、いちぢに行ずるという点において共通している。

さらに善導大師はこの五種の行を二分し、四番目の称名正行を「正定業」とし、他の四種を「正定業」に対する「助業」と呼び、そしてこれら五種以外の行をすべて「雑行」・「疎雑の行」としてしりぞけている。

三

このように善導大師は往生の行として五種の正行をあ

げ、そのうち称名を特に「正定業」して重視しているが、これについて、次のようにのべている。

一心にもつばら弥陀の名号を念じて、行住坐臥に時節の久近を問はず、念々に捨てざるもの、これを正定の業と名づく、かの仏の本願に願するが故に。

この文の言わんとしているところは、浄土への往生を願いつつ、日常生活のいかなる場面においても、歩いている時でも、坐っている時でも、あるいは床についている時でも、時々刻々に念仏を口して、決して捨てないのを「正定の業」というのである、それは阿弥陀仏がこの行につとめるものをすべて救いとなければやまないと、本願に誓っているからであり、これによって必ず往生は決定する、というのである。

善導大師が称名念仏をもって、特に「正定の業」とした理由は、先の文からいえば、最後の「かの仏の願に願する故に」、つまりこの行は阿弥陀仏が本願に誓った行であり、これを修することは、とりもなおさずその願にしたがいゆくことになるからである。この点については、法然上人も本章の私釈で特に問答をもうけ、先の五種の正行の中で称名を正定業とする理由を問い、それに對して

かの仏の願に願するが故に。意の云く（その意味は）、称名念仏はこれかの仏の本願行なり。故にこれを修する者は、かの仏の願に乗じてかならず往生することを得

と答え、称名念仏が阿弥陀仏の本願に基づく行である点を強調している。

そうすると次に問題になるのは、本願とは何か、なぜ本願によって浄土への往生が可能になるのか、という点であろう。この問題は浄土の教えに関心を持つものに、いつでもつきまとう。だが法然上人はこれについて、「その仏の本願の義、下に至りて知るべし」といい、その説明を第三章段にゆずっている。

したがって、ここでその問題にふれることはできないが、法然上人を念仏の専修にふみきらせたのは、善導大師の、称名は阿弥陀仏の本願に基づく行であり、それをもつばらにすることによって、かならず浄土に往生しうる、という教えであった。それは具体的には先にあげた「一心にもつばら弥陀の名号を念じて……」の文章であり、またこの文が浄土宗開宗の文ともされている。

その辺の事情について、法然上人の伝記『四十八巻伝』は次のように説明している。

かなしきかな、かなしきかな、かなしきかな、いか
かせむ、ここに我等がときはすでに戒定慧の三学
の器にあらず。この三学のほかに我心に相応する法
門ありや、我身にたへたる修行やあると、よろづの
智者にもとめ、もろもろの学者にとぶらひしに、を
しふるに人もなく、しめす輩もなし。しかる間、な
げきなげき経蔵にいり、かなしみかなしみ聖教にむ
かひて、手みずからひらき見しに、善導和尚の観經
の疏の「一心にもつばら弥陀の名号を念じて、行住
坐臥に時節の久近を問はず、念々に捨てざる者、こ
れを正定の業と名づく、かの仏の願に順ずるが故
に、といふ文を見得てのみ、我等のごとくの無智の
身はひとへにこの文をあふぎ、もつばらこのことは
りをたのみて、「念々に捨てず」の称名を修して、決
定往生の業因に備ふべし、ただ善導の遺教を信ずる
のみにあらず、またあつく弥陀の弘誓（本願）に順
ぜり、「かの仏の願に順ずるが故に」の文、ふかく
魂にそみ、心にとどめたるなり。（仮名づかい等、
適宜改めた）
かくして、

承安五年の春、生年四十三才たちどころに余行をす

てて、一向に念仏に帰したまひにけり、
となるのである。少々長い引用になったが、右の文章か
ら、専修念仏にいたるまでの、悪戦苦闘する法然上人の
姿が十分うかがえるであろう。それは「知恵のまなこし
ゐて、行法のあし折れたるともがら」である自分の現実
の姿を擬視することからはじまる。この点についてはい
ずれ念仏者の心を説明した第八章段で三心を説明する際
ふれられるであろうが、法然上人の専修念仏について考
える時には、この問題を素通りすることはできない。

四

以上、「正定業」としての称名正行を中心に第二章段に
ついてのべてきた。本章にはさらにとりあげねばならな
い問題もあるが、紙面にも限りがあるので、今回はふれ
ることができなかった。

最後に本章の末尾にある法然上人の言葉を引いて結び
とする。

あに百即百生（百人が百人ながらすべて往生する）
の専修正行を捨てて、かたく千中無一（千人の中で
一人も救われない）の雑修難行を報せんや。行者よ
くこれを思量せよ。



法然上人をめぐる人びと(三)

— 遊蓮房円照 —

念仏人と歴史

伊 藤 唯 真

(仏教大学助教授)

浄土の法門と、遊蓮房とにあへること
人界の生をうける、思出にては侍れ

— 法然上人のお言葉(勅伝四四) —

人には、なにかとの巡り会いによって人生の行く手が
決められることがあり、その尊い出会いのことが生涯心
に刻みこまれていくものである。

法然上人は、浄土の教と遊蓮房円照とに出会ったこと
がわが生涯での思い出である、と常に述懐されていた。

浄土の教門と並んで、遊蓮房との触れ合いが、法然上人
の心の中で大きな位置を占めていたのである。

法然上人と遊蓮房との二人の出会いには、瞬時にして
心の通いを成立さす宗教的共感があり、その感銘の深

さ、強さが法然上人の胸中に遊蓮房の印象をながく留め
させたのである。遊蓮房の臨終には法然上人が善知識を
つとめられるなど、二人の間には短い期間ではあったが、
深い交わりがあった。法然上人にとって、遊蓮房は、ま
ことに忘れ難き、思い出の人であった。

遊蓮房は、後白河上皇の近臣として権勢を振った少納
言入道信西(藤原通憲)を父に、近江守高階重仲の女を
母として、西行が出家した前年の保延五年(一一三九)
に生まれ、法然上人の浄土開宗後二年目の治承元年(一
一七七)に、三十九歳を一期に病没した。父の信西入道
は平治の乱で殺されたが、当代一流の学者として知ら
れ、秀れた子息に恵まれ、それぞれ政界、教界に進出させ

た。有名な安居院の澄憲、高野山の明遍は信西入道の子である。

遊蓮房は俗名を是憲と云い、兄弟の中でも特に学者としての父の才能を受け嗣ぎ、若くして信濃守に任ぜられたが、平治の乱で父に縁座して解官となり、安房国（一説に佐渡国）に流されることになった。一族の流罪は乱後二ヶ月にして許されているので、是憲は実際に配所へ赴かず、流罪決定後すぐに出家したものと思われる。時に二十一歳。出家後は遊蓮房円照と称し、在俗中の官職に因んで信濃入道とも呼ばれた。若し平治の乱が起きなければ、学者として大成していたであろう。言葉かすも少ない、もの静かな性格で、瘠せ型のどことなくひ弱い感じのするインテリであった。

出家後の住所は西山の広谷であった。広谷は栗生光明寺の後山で、同寺の法然上人廟所から西南へ約四町ばかりの所である。遊蓮房はここに隠棲して、道心堅固に、念仏に勇猛精進の日々を送った。遊蓮房は初心のとき法花経を覚えたこともあったが、のちは経一巻も書籍一巻も持たず、「一向念仏、バカリ」であった。また、少しでも他所へ出かけるときには極楽曼陀羅を持ち歩き、休憩したり宿泊する所では西の方にこれをかけて拝み、極楽

六時讃を誦して念仏を申されたという。出家後は俗塵を一切避け、ひたすら念仏の生活に邁進し、一族の者はこそって遊蓮房を仏の如く尊んだのである。

最後の思ひのとき遊蓮房は弟の澄憲に書状を送ったが、それには、貴房のような智者は世間の人から後世のつとめのことについて尋ねられることも多いであろうが、そのときにはぜひ「一向ニ念仏ヲマウセと御勸進」下さい、と書かれていた。

この書状を受け取った澄憲は、なにことも確信がない限りものごとをはっきりと言いつつ切らない遊蓮房が、このようにきっぱりと後世のつとめに一向念仏を勧めよと書いてよこす以上、遊蓮房は念仏の現証を得たに相違ない筈だから一度たずねてみよう、と思い立ったが果さないうちに遊蓮房がなくなってしまった。

澄憲は、遊蓮房が念仏の現証を得たことを、直接本人から聞くことができなかったが、南都修善院の信憲は、証しを得られた由を人に語ったことがあった。信憲は遊蓮房の兄の俊憲の子であり、かつ遊蓮房の弟の覚憲の弟子であった。この信憲によれば、故遊蓮房は

高声念信ハ、カナラズ現徳ヲウル行ナリ。（中略）予祖師（善導）ノアトヲオモヒテ、三寸火舎ニ香ヲモリ

テ、ソノ香ノモヘハツルマデニ合掌シテ、毎日三時高
声ニ念仏スルコトヒサシクナリス。ソノ間ニ靈証ヲエ
タル事度々ナリ。(明義進行集)
と申されたという。

遊蓮房が軌範としたのは善導大師であった。『明義進
行集』に載せられている信憲所伝の遊蓮房の言葉から
も、善導大師の行業に注目していたことが窺われる。極
楽曼陀羅をかけて念仏を修するなど天台的な観相念仏の
面もあるが、善導の意に立脚した高声の称名中心主義が
遊蓮房の宗教の根幹であった。遊蓮房は高声称名の実践
者であり、そして、その念仏において「靈証ヲエタル事
度々」の念仏聖であった。一族が仏の如く遊蓮房を敬っ
たのもこのためである。遊蓮房はまさしく念仏三昧の瑞
証を得た念仏者であった。

後世のための勤めは一向称念において他にないという
確信を持ち、念仏において靈証を得ていた遊蓮房は法然
上人にとってよき先達であった。法然上人は善導大師の
『観経疏』を依拠として宗教的自己変革を遂げられた
が、法然上人にとってみれば、その回心を支えたのは善
導大師の書物だけでなく、善導その人のすべてであっ

た。法然上人は善導大師を「道においてすでに証しある」
「三昧発得の人」として渴仰したのである。遊蓮房は法
然上人より六歳下であった。歳下であっても、既に念仏
において現証を得ていた遊蓮房のことを聞き及んだなら
ば、法然上人は求道のため現身得証の人の許に馳せ参ぜ
ずにはおれなかったのである。

浄土開宗以前、法然上人が山上で親近していたのは、
師の叡空をのぞけば信空であり、この信空と遊蓮房との
間には俗縁があった。法然上人はこの信空を介して、高
声念仏のうちに三昧の現証を得ていた遊蓮房のことを知
り、比叡山から西山の広谷へ下ったのである。善導に傾
倒し、漸く到達した自己の宗教を、この身近かな念仏現
証の同法者によって、さらに確固たるものとせんがため
であった。

広谷を出合いの場とした二人の接触は、ほんの二、三
年の間であった。しかし念仏現証の聖に接して、法然上
人の善導依憑の想い一向念仏の決意はいよいよ固めら
れ、教化へのひそかな意欲も高められたのである。この
ように、浄土宗開宗という思い出の時期に遊蓮房の出会
いを持ち得たことは、法然上人にとって終生忘れ得ざる
ことであった。

旅行をする方法には二つの場合がある。一つは案内書観光業者にしたよる方法で、最も安全であり、主要な名所旧跡をうっかり見落す心配がない。これはオーソドックス（正統）のやり方である。これと違うやり方は旅行がしたくなると、自分の足と目で自由に気の向くままに歩きまわる方法だが、これは名所旧跡を見おとしたりする失策や、困難を惹起し易いが、新発見をすることも危険の多いヘテロドックス異端のやり方である。

九州別府にある杉の井ホテルで同級会が催されたので、同行と六日間の日程で、出かけた。別府まではまあいい、あとは自分の足で気ままに、いいかげんに歩いて行きたいと思った。同行は私を観光の添乗員と思ひ、安心して唯ついてくるのみである。オーソドックスの態度である。私がどこに泊るか、どこまで行程を延ばすかときいても無関心で、唯信頼してついてくるのみだ。五日目に佐賀県の嬉野温泉に宿泊した。ここは大村線彼杵駅から十二キロの所にあり、神功皇后

筑後善導寺紀行



＝山梨県甲府尊徳寺住職＝

磯貝基教

の伝えに面白い話がある。皇后三韓征伐の帰途この地を過ぎたところ、一羽の鶴が飛来し、川原のいで湯に足を浸していたが、やがて勢よく、羽ばたいて飛び去った。これを見て、将士をこのいで湯に浴させたところが、傷病は短時日に恢復した。皇后は、大変喜ばれ、「ああ嬉哉」と三度も叫ばれたという。後これを伝えて嬉哉が嬉野に転じ地名となったという。丘陵にかこまれた盆地であり、清らかな嬉野川のほとりに元湯浴場の古風な洋館があり、古い歴史がうかがわれ、湯は高温で、豊富な嬉野茶の産地であり、付近に有田焼窯元もある。この嬉野に一泊した翌日は雨だ。さて佐世保にて、西海橋から九十九島に行くか、久留米に出るか、一思案の末に自分の足と目で気のむくままに出かけることにした。同行はどこに行くか不安そうだ。さてバスにゆられて二時間あまり、筑後の善導寺へと志した。西鉄のターミナルで車をひろったが、土地の人は善導寺という寺は知らないという。しかし善導寺町があるので探すように

たのみこみ、約三十分位不安のうちにすごした。私の思い通り、やはりひなびた町の中に大本山善導寺の標示を見て安堵の思いであった。

この日は霧雨にけぶっていた。長い参道には古色蒼然たる松が生い茂っていた。山門を入ると大きく開けた地到大桶がある。樹令七五〇年、天然記念物に指定されていた。その先の方に菩提樹がうつ蒼と茂りに茂っていた。何か寺を象徴するかに思われた。

私は寺に訪れずに、自分の目で足で観察することにした。当寺は筑後国三井郡善導寺村にある。現在は福岡県久留米市善導寺町飯田五五〇。大紹正宗国師棲身入寂の靈地にて、浄土宗鏡西派の根本道場といわれている。境内地は三町六反一畝十二歩。本堂は間口十五間、奥行十四間半、建坪二一七坪半の広大なもので、天明六年、四十八世三誓上人重建といわれ、本尊阿弥陀仏、脇土観世音勢至二菩薩が安置されている。三門は間口五間、奥行三間、建坪十五坪、安政六年重建といわれる。其他三祖堂。釈迦堂。開山廟堂。経蔵。開山大紹正宗国師多宝塔。書院鐘樓。集会堂。(浄土宗全書)開山大紹正宗国師は浄土宗の第二祖である。その教化活動の地域鎮西に従って、鎮西上人と称せられている。

善導寺の名称は建暦二年国師の夢に、「善導大師示現しての

給はく、我れら今筑前同博多の津を渡れり、汝速かに迎へるとべし」と国師雲告により、彼の地に向かひて之を求むるに一舶あり、国師船主について夢の次第を語り給うに、船主いわく、一僧あり飄然として来りて船に投ず、其の風ほう常人に同じからず、今既に上陸して彼の松原に入れりと、国師之をきき馳せて其の処に至るに更に人影なく、唯善導大師の尊像儼然として樹下に立ち給へるを見るのみ、国師驚愕して未曾有なりと歎じ、胆仰頂礼して像を迎へて寺内に影堂を建て之を安置す、因りて世人呼んで善導寺と呼す」という。

私が善導寺に関心をもったのは、私の寺の本尊真向如来が善導大師の御真筆であり、本尊は初め大覚禪師道隆が禁中に招来し、後に石清水に遷し、それより武田信虎が大永中に竹松君の菩提寺である当尊跡寺に賜るといわれているからである。尚善導大師は観経疏、法事讃など著述し、観無量寿經を徹底的に掘り下げて考察したために、阿弥陀仏身や仏身の普遍性を強調し、如何なる機根のものでも口称念仏することにより、浄土に往生することが出来るという、純正浄土教の教理を大成し、口称念仏を浄土教の本質としたことにより、法然上人は専修念仏に帰入した精神の開眼の根本をなすものである。私は二祖上人が如何にして元祖のあとをつぎ、浄土教を進展したかを知らたかったからだ。

大紹正宗国師の諱は弁長、字は弁阿聖光房と号し、応保二年五月六日に筑前国遠賀郡香月庄に誕生された。彈正左衛門尉則茂入道順乗の息である。九才にして剃染して、十四才にて戒をうけ、天台の教旨を学び、比叡山に登り、在山八年にして天台の教学を伝え、建久元年郷に還り、油山の学頭となった。後上洛して東山の禪堂に詣り、元祖法然上人に謁した。国師はまことに凡夫解脱の直路は浄土の一門、念仏の要行にはしかざりと信解して、宗祖の門に入ったのは、宗祖御年六十五歳、国師三十六歳で、時は建久八年五月上旬であったという。当時は元祖には数多の道俗の帰依者があり、法然上人の浄土教理こそ浄土教の真髓が開顯されたものであって、元祖を中核とした集団の成長を見たわけで、建久九年には九条兼実の懇請によって、選択本願念仏集が選述された時代であった。即ち法然上人に奉仕することにより、称名念仏の伝持弘道にいそしんだわけである。宗祖との初対面の際に宗祖は三重念仏、即ち摩訶止観の念仏、往生要集の念仏、善導勸化の念仏、の義を提示なさったが、国師は宗祖の文義広博にして智解深遠なるに驚嘆して、渴仰の思い深く爾後三ヶ月間、吉水の禪房を往来して浄土宗の宗義をことごとく習学伝承して、具さにその庭訓を受けたのである。殊に宗祖からも、汝は法器なり、伝持に堪えたり、と許されたほどの偉大

なる行者であり、浄土宗の第二祖と仰がれるにふさわしい国師であった。

境内一ぱいに生い茂っている楠、菩提樹の深緑は雨にけぶって、ひとしおあざやかである。あたりは静寂そのものである。今まで歩いた観光地の雑踏と汚れをさけて、しみじみとした蘇生の思いである。高大な古風の大伽藍とみ仏には、華美なきらびやかさはなく落ち付いた、たたずまいと物のあわれと、古びた地味の感じの中に思っておこすのである。この境内と金堂のそここには、かつての国師の足跡と念仏修行の声と、一本の草木に、一枚の板に、柱に、一個の石にも国師の苦難經營研修のあせの跡を感じとった。私は国師と共にあり、雨にぬれるのも忘れてあたりをくまなく逍遙遊した。重ねていう国師はこの筑後の地にて春優美なるあか星のあしたに、錦おりなす静寂な秋の夜更に、あかつき寒き冬の僧房に端心正行、ただ甚深の念仏三昧に思いを凝らした国師の余香が、寺の中のあらゆる処にしみわたっているのを、再び感じた。七十七歳の高齢にてこの善導寺にて示寂された国師は、この世に念仏道の高揚流布する限り、宗祖と共に衆生の上に來現するであろうと思いが、感慨ひとしおに満ち足りた気持で静かに寺をさった。さて車の中で今日の泊りは博多か太宰府近くの二日市温泉にしようかと思案にくれた。

異僧眞覺

第十四回

柴田六五郎

(滋賀県近江八幡市在住)



「眞覺さん」

と妙春の声が聞こえた。

「まさか？……俺が妙春の姿を想像していたので。空耳^{そり}というやつだな」

眼をつぶったが暫くすると今度は又はっきりと呼ばれた。

彼は振り返った。何時の間に來たのか、妙春が背後^{しやうし}にひっそりと座っていた。

「どうしたのだ？」

「貴方と一緒に参ります」

「馬鹿な」

「こんな事になったのは私にも罪があります。いいえ、私の方が罪が重いかも知れません。もう寺には居れません。何処へでも連れて行って下さい」

「いかん。帰れ！ 俺の責任だ。お前に責任は無い。それに、二人共居なくなったら和尚がどんなに困るか」

「そうです。だから私が出る事はお許しになりません。それが判っていますから黙って出て来ました」

「黙って來たのなら幸いだ。今のうちに急いで帰れ」

「帰りません。本當の事を言うと、私は、もう貴方が居なくては生きていかれません。何処迄も尾いて行きます」

「何を言うっ！ 氣でも狂ったのか」

「はい、狂いました。貴方に鉢を撫でられた瞬間から、私は狂ってしまいました。尼僧の私が狂って、女の私がまともになつたのです」

思いつめた眼でそう言った。その妙春の言葉は「グサツ」と彼の心臓につきささった。返す言葉が無かった。そう聞け



＝善住寺の築地＝

ば（女犯云々）どころでは無い。もっとひどい事を俺はしてしまつたのだ。被害者はむしろ妙春なのだ。どうすればよいのだ。一体どうすれば）思案がつかなかった。思案がつかぬまま、重い脚を東山から逢坂の峠に運ぶ真覚に、寄り添うよう

に妙春が従つた。

「俺が六角堂に詣ることがどうして判つた」

真覚は、やつと口を開いた。

「貴方は一たん思い立つた事を中途でやめる方ではありません。きつと如意輪観音をお彫りになります。その為にもきつと六角堂へお詣りになることと目星をつけて後を追いました」
「これから善住寺とかへ行かれる前に、やはり石山の観音様にもお詣りになるでしょう。私もお供致します」

彼は答えなかった。石山迄は致し方無いとしても、善住寺まで同道することは出来ぬ。何時、誰からきくともなく其の寺が空いていると聞いて、勝手に今日からの住いと決めているにすぎず、果して自分の思わく通りにゆくかどうか知れたものでは無い。若しそうなるとしても、尼僧を連れて寺に入る等思ひもよらぬ事である。それに若し入ることが出来ねば、未だ肌寒い夜を野宿しなければならぬかも知れぬ。

逢坂の山間の雑木の芽が霞むように萌え出で、それらに紛つた幾本かの桜が、うすく紅を含んだ蕾をふくらませ、道の辺りのすみれ草が、往還の土埃を浴びながらも可憐な粧いをこらしている風情も彼の眼には入らなかつた。坂を降りかかつて眼の前に琵琶の湖が雄大に開けた時、彼はやつと自分を取り戻した。八年振りに見る湖である。妙春は湖の眺めに驚いた。

「まあ美しい。これが湖ですか。まるで海のようにですね。貴方の生れたのはどの辺りです？」

「此処からは見えぬ。もっとずっと向うだ」

「石山さんは？」

「それをもっと先だ。さあ、もう二里程もあるかな」

何処までも随いて来る妙春の処置にあぐね乍らも、こうしてたとえ今日一日でも二人して道行くそこはかとなき楽しさが彼を領し始めた。

「未だ日が高い。ついでの事に三井寺へもお詣りしてゆこうか？ それにあそこは高台だから湖もよく見えるだろう」

彼も未だ知らぬ三井寺は、本堂の前が自然に見晴し台のようになっている、大津の街並みを越して琵琶の眺望が拡がっている。

「あの右の方で湖がくびれたように狭まっている辺りが俺の生れ在所だ。その手前から右へ流れるのが勢多川だ」

「あの、真向いに見える恰好のよい山は？」

「ああ、あれはたしか三上山と云うのだらう。形が富士に似ているので近江富士とか云うのださうだ」

その辺りから先は、山も湖も霞の中に溶けこんで模糊として判じ難い。

（此の景色は俺と一緒にだ。目の前だけしか見えぬわい）

そう思うと何となく可笑しさが込み上げて来て、独り苦い笑いを噛みしめた。

未だ花には早い石山寺は、かつて竟空院主に連れられて来た日とはうって違って閑散としていた。僧衣の二人を、本堂の役僧は

「どうぞ御内陣へ」

と招じてくれた。二臂の如意輪観音は岩の上に左脚を垂れ右の膝を立てて二人を見おろして何か言いたげに見える。湯仰措く能わざる如意輪観音を拝して真覚の手が思わず伸びようとしたのを妙春がそっと袂をおさえた。

「勿体ない。撫でるなら私を」

と妙春がささやいた。真覚は我に返って手を引いたが、ジロツト妙春を見た。その心事はまことに複雑であった。

山門前の茶店で休もうという妙春に答えもせず彼は脚を速めた。唐橋の袂まで来ると、くるっと振り返り、宣言するように言った。

「もう帰れ、此処迄だ」

「いいえ、帰りません。何処迄も貴方と一緒にです」

「いかん。これ以上一緒にいたらどうなるか判らぬ」

「どうなっても構いません」

「そうなれば俺は死なねばならん」

「死ぬ？　死ぬなんて。いいえ死んではいけません。貴方は観音様を彫らねばなりません」

「そうだ。それは彫らねばならぬ」

「きつと彫って下さいますか？」

「彫る。きつとだ。どれ程かかっても」

「きつとですね。それで安心致しました。では帰ります。帰りますけれど、貴方が観音様を彫ったらその時は必ず貴方のもとへ参ります」

彼は意外な面持ちで妙春の顔を見た。

「それは？」

「いえ、そうするのです。そうでなければ私は浮かばれません」
彼は返答につまった。

「さあ、それでは参りましょう。もうすぐでしょう。お寺の様子を一眼見ればそれでよいのです。私はすぐに引返しますから」

ほつとした彼は橋を渡り始めた。

比叡の山脈に傾いた夕日が湖の面を赫く染め、橋を渡る二人の影が川面に幻のように映った。その影を見つめながら妙春が尋いた。

「此の流れの末は何処に行くのですか？」

「宇治川に入って、やがて海に出るのだろう」

「海に！　海ですね。ずうっと西の海ですね」

「うん、海にだ」

橋を渡り切って東に七八丁、右手の小高い台地の裾を廻ると大友皇子を祀る御霊神社。その左手の竹藪の蔭に、荒廃した、如何にも無住の寺らしい気配を漂わせて善住寺が静まり返っていた。

施錠の無い堂庫裡の戸はギンギンと軋みながら開いた。黴臭いにおいが鼻をついた。手探りでローソクを探し出した真覚は、その仄仏前に念仏を始め、妙春は後ろで事をひそめてこれに和した。略々小半刻の念仏を終えると真覚は、ぐるっと座を転じて妙春に対した。妙春は静かに頭をさげると、そつと膝を立てた。ヒタヒタと石段を降りる足音が消えた時、彼はつと腰を浮かせた。夜道を独り帰ってゆく妙春を想うと腸がチ切れる思いで「兎も角、今夜は此処に泊めて」咄嗟にそう考えたが「いや、そんなことをすれば愈々取り返しがつかなくなる」そう思い直して腰を降ろした。ローソクの明りで夜具を探したが、久しく人の住まぬ此の寺にそんなものがある筈もなく、やむなく堂の隅に埃を一杯かぶって積まれた参詣人用の薄い座布団を身のたけ程に並べると、その上にゴロツと横になった。横にはなったものの、そして身も心もくたくたに疲れ果てているのに眼は冴えるばかりであった。五里の夜道を帰る妙春が哀れでならなかった。

この二十番札所、誓願寺は、西山深草派の総本山である。この西山深草派は、浄土宗の宗祖法然上人の弟子証空上人が開かれた西山派の中の一の派で円空上人によって開かれた一派である。現在のこの派の寺院は二五〇余り、信者の総数六



万弱と、極めて小さな教団である。

現在の本堂は、昭和七年新京極の大火の際焼失し、昭和三十六年、宗祖法然上人の七百五十年遠忌（浄土宗のみ御忌と云う）の記念事業として再建されたものである。

てねを訪る霊場

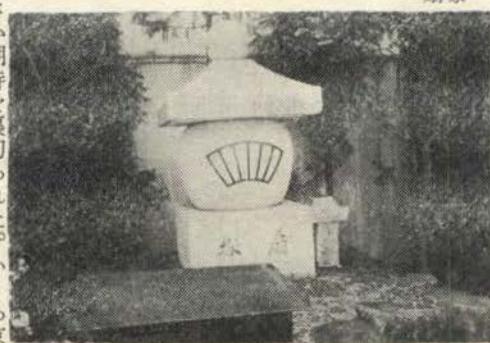
二十番札所

〈京都誓願寺〉

真 正 子 兼

私がここを尋ねたのは、正月三日のことであった。正月という時節から、新京極は、人であふれんばかりであった。その新京極の通りを進んで行った。すると右側に誓願寺はあった。この寺については、名前を聞き知っていた程度であった

一扇塚



が、行ってみて、私はいささか期待を裏切られた。いくら京都の繁華街の中にあるとしても、これほど雑沓が、寺の中まで聞えるほど小さな寺だとは思わなかったからである。したがって、私の考えていた静寂たる趣きを持った寺ではなかつ

た。

しかしながら、この誓願寺の本堂に一步足を踏み入れて、私は来てよかったと思った。にらみつけるような阿弥陀様が、本堂の中央にこちらを向いて坐っている。何んだか怖いような阿弥陀様だった。その前に坐って私もじっとその仏様の顔を見た。そして阿弥陀様が私に、

「よく来たな……」

とおっしゃったような気になった。

そして、法要が始まった。(なぜなら私は、伯父が昨年亡くなり、その納骨に來ている。)私に焼香の順番が来た。前に進み出でると、丈六の阿弥陀様は一層大きく、上からじっとみている。本当に怖い思いをした。今までもその時のことははっきり頭の中に残っている。

聞くところによると、この阿弥陀様は、飛鳥時代の昔、当時の仏工彫刻師、賢問子、芥子国の父子によって作られたそう。うだ。「よくも千三百年もの長い間じっと坐っておれるなあ」と私は思ったが、その長い間に、日本の仏教の流れも大きく変化したことを何よりもよく知っているのはこの阿弥陀様だろうと思う。

そして、幾多の戦火によって、何回となく修理された聞く。その間、大多数の日本人を見てきたのであろう。昔は、

清少納言(彼女はここで菩提心をおこし比丘尼になっていた)や和泉式部(彼女もこの一庵で住した)などの顔ながめ、彼女たちの心をなぐさめたことであろうし、安土桃山の時代には、戦に傷付いた名もない兵士の死も見たろうし、明治維新の際の戦いも見てきた、と私に何かいいかげんようだった。

この寺には、京都の繁華街ということから願塚というのがある。これは、芸道修行や願望成就を祈願するものだそう。

そして、この寺は現在、新西国霊場にも入っている、十五番札所でもある。

それは、観音堂と地藏堂で、本尊の阿弥陀様を作った、賢問子と芥子国が、それぞれ、六臂の観音菩薩と地藏菩薩に化身して、仕事にはげんでいたという縁起によるものである。またこの寺の第五十世安樂庵策伝上人は、落語の始祖として、上方落語、江戸落語の先駆をなしたといわれ、その著「醒醉笑」八巻は有名である。十一月の第二日曜には、策伝忌として、落語の会と献茶の会が催される。

このようにして、私の誓願寺訪問は幕となったのであるが、今でも心に強く残っていることは、やはり、あの怖い目をした阿弥陀様のお顔である。



大谷の禪房

高橋良和

いく度か京都東山の法然上人の住房のことを書いたが、今回は更に詳しくその一つ大谷の住房を紹介してみたい。

法然上人が比叡山西塔黒谷の地をはなれて、洛西の西山広谷において念仏し、その後洛東、東山々麗の粟田青蓮院の境内の茶庵に住んだのであるが、その住居を吉水の庵室と称していた。

この東山の一帯、三条から南へずーつと今の円山公園の真葛原までは、天台宗の五箇堂門跡である粟田青蓮院の寺領であった。

この吉水の庵室は、西山広谷の庵室に移したものであって、大体において三カ

所に分かれていたとつたえられている。その一つは、二つ岩の禪房、松下の禪房、清水の禪房というのである。

その二つ岩の禪房は、今の知恩院大殿のあたり、松下の禪房は、大鐘楼のあたり、清水の禪房は三門の付近ということである。そして法然上人は、この三つの禪房のうち主として二つ岩の禪房に住まわれることが多かったようである。

然しこの吉水の禪房も、法然上人が四国に流罪になったあとの五年間には相当荒廃したらしいのである。そのころの京都には、念仏聖といわれる法然上人の流れを汲む僧達に対して迫害があったの

で、群盗が夜行して、寺々は荒されだし、そればかりでなく、法然上人の門弟たちに対して、衣を破り、石を投げるようなこともあったので、吉水の庵室も相当破損したらしい。

そして法然上人は、四国から大阪の箕面の勝尾寺に四カ年逗留して、京都にかえってきたときには、住むところもなかったようであった。

ところがたまたま当時粟田青蓮院の慈鎮和尚（慈円ともいう）がこの様子をみて、青蓮院の一つの坊舎を法然上人に提供したのである。その寺は南禅院という堂宇であり、大谷の山上にあったといわ

れている。

大谷というのは、東山の一つの峰である將軍塚あたりから流れてくる大谷川の溪流をはさむ谷であつて、今はこの大谷川も水がなく、木の葉や、土で埋まっているようであるが、その間の谷を大谷というのである。これは、徳川二代將軍秀忠、三代將軍家光の二代によつて今日の知恩院の殿堂が完成したので、その工事の際にこの大谷を地ならしして平地にしたのであつて、今の場所であつて、友禪苑のあたりから、山上の泰平亭から、鐘楼のあたりであると想像される。

この大谷が後に大谷派という真宗の宗旨の名となり知恩院山内にも元大谷本願寺故地という表柱が建てられているし、その上、知恩院の阿弥陀堂の屋根にあげられている後奈良天皇の勅額の大谷寺の名でもわかるのである。

そこで考へて欲しいのは、法然上人が四国流罪の前に住房としたところは、吉

水の庵室と称していたが、四国から勝尾寺へ、そして京都へと、かえつてきたときの住房の名は、大谷の禪房ということである。

從來このようなことはあまりやかましくなく、今日までどちらともなく呼ばれてきているのであるが、これははっきり区別をしてほしい。

四十八巻伝にも、この二つの住房を区別しているが、大谷の禪房は、またの呼び名を、「東山大谷の聖人の御房の御堂」とも言うし、「大谷の房」、「大谷の聖人の御房」とも言うことが諸人靈夢記に記されている。

大谷という呼び名は、それがそのまま法然上人の住居ということに通じるのである。

法然上人は、その住房で建暦二年正月二十五日に入滅するまで住んだのであり、必然一枚起請文はこの大谷禪房で記したということにもなる。

大谷の山上ということになると、今の勢至堂の地といえるが、四十八巻伝には、大谷は上人往生の地なり、かの跡今にあり東西三丈余、南北十丈ばかり、このうちにたてられけん場合、いくほどのかまへにかあらんと見えたり、その節儉のほども、おもいかかれてあはれにたとくぞ（尊くぞの意）侍る。

とある。

そしてここで入滅のあと、その東堂の地に埋葬したということであるが、それが今の知恩院の御廟をさすのであらう。

吉水の庵室の地は、今の知恩院のつぎにある時宗の安養寺付近ということである。そこで多くの弟子たちが法然上人から念仏のおしえを聞いたのであるが、親鸞との出会いもこの吉水の庵室であるといえる。安養寺は慈円山というから、慈鎮和尚すなわち慈円僧正の住職地であり、この慈円山が円山となり、今の円山公園の名の起りでもある。

浄土宗の宝物

大樹寺と松平氏

愛知県岡崎の大樹寺は、徳川氏の先祖、松平氏八代の菩提寺として、江戸時代になると將軍徳川家の位牌所として非常に重要な役割を果たした浄土宗の名刹寺院である。大樹寺は成道山松安院と号し、文明七年（一四七五）松平四代の親忠（西忠）を開基とし、勢普愚匠を開山として創立以来松平一門の手厚い保護をうけて発展している。親忠（西忠）は文亀元年（一五〇一）八月、大樹寺で寂しているが、彼が生前に残した遺言状は非常に有名であり、中世武將の往生に対する考え方をます恰好の史料であり、いずれ別の機会に述べたいと思っている。

それはともかく、いまここに紹介した写真は、大樹寺に現存する松平一門の連判状である。

大樹寺において定らる条々の事

禁制

- 一 当寺中において狼藉の事
- 一 竹木伐取の事
- 一 僧衆に対して非儀いたすの事

右此旨に背くの輩においては、堅く罪科に処すべく候。当寺の事、西忠位牌所たるの上は、自然、国いかよの儀出来候とも、彼の人数をして警固致すべきものなり。仍て件のごとし。

文亀元年 西八月十六日（連署名略）

即ち、文亀元年八月四代親忠（西忠）が死ぬと、とかく今川氏の三河侵入が噂されていたようである。そのため五代長親（道閔）は、西忠の位牌所である菩提寺大樹寺を守護するという名目のもとに、この連判状を作成し、一門の結束をはかっている。ここでは丸根美作守家勝以下十五名が連署している。それぞれ丸根・田原・上平・岩津等と名乗っているが、これは所在地を冠しているものであり、いずれも松平氏の支流の一族である。松平氏は後に十八松平といわれるようになるが、このころはまだ十六であったようである。

いずれにしても、このように菩提寺を中心として一族の結束をはかっているこの連判状は非常に興味ある史料であり、当時の戦国武將の寺社に対する考え方がうかがわれる。更に松平氏は前述したように、後に江戸幕府を開いた徳川家康の先祖であり、単に大樹寺との関係がわかるだけではなく、文亀元年頃における松平一門の軍団編成や勢力分布がうかがわれ政治史の上でも注目されるものである。

（宇高良哲）

秋の御寺家

書簡

一、當寺中、敬信之事

一、竹本代取之事

一、對儒教、水溪之事

一、對佛、當寺者、思可、康、永、村、以

一、對寺之事、西恩、為、信、野、不、上、其、以

一、國、以、何、振、信、會、事、を、る、以、人、教、一、致

一、對、同、名、也、何、以、洋

文正元年 辛酉八月十六日

次才不同

次才不同

名譽

田家

年々

若林

若林

若林

若林

若林

若林

若林

若林

若林

若林

若林

「浄土」購読規定

一部 定価 百円

(送料十二円)

会費一力年金一、二〇〇円

(送料 不要)

浄土 三月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和四十八年二月二十五日 印刷
昭和四十八年三月一日 発行

定価 百円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十二ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

千一〇二 振替東京八二一八七番

浄土宗開宗八百年記念トラクト

『法然上人と浄土宗』

第一編 法然上人のあゆみ

第二編 浄土宗のおしえ

第三編 信徒の心得

B6判 96頁 予価 160円 (200部以上 140円)

間もなく開宗八百年の聖辰を迎えます。本会ではこの慶祝を期しトラクトを作成いたしました。檀信徒用施本・慶讃法要記念品などとして広くご利用下さい。

浄土トラクト

『浄土宗のおつとめ』 村瀬秀雄著

B6判 本文24頁 価 50円 100部以上 45円 ㇔ 25円

“お彼岸の施本に好適”

本会発行の

『ひ が ん 会』 春季号

新書判・表紙共12頁・価15円 (200部以上13円) (送料実費)

各々御用のむきは早目に本会へお申込み下さい。

㇔102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (03) 262-5944 番